

# 神奈川 芸術プレス

vol.168

KANAGAWA ARTS PRESS

2026年(令和8年) 3月1日発行



特集

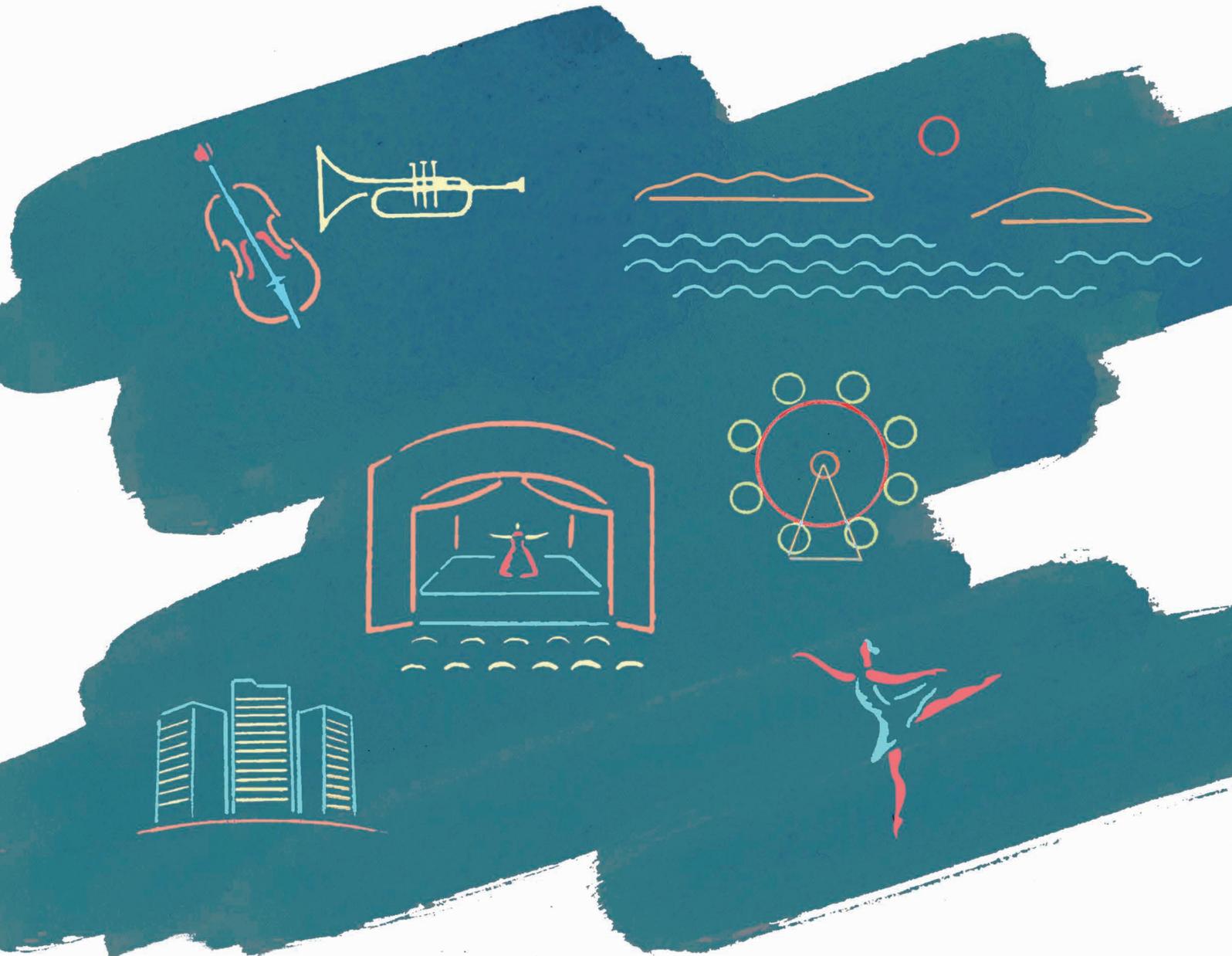
## まちと響きあう表現

**TOPICS** 「藤沢市民オペラ」、「カナガワ ポトガラヒー 出張浅田撮影局 | 開成編・真鶴編」、  
神奈川県立音楽堂と市民合唱、「黄金町バザール」、「横濱 JAZZ PROMENADE」街角ライブ

**INTERVIEW** 山本理顕(建築家)、アオキ裕キ(ダンサー／振付家)

**COLUMN** 旅と浮世絵(平塚市美術館学芸員・家田奈穂)

連載 アートシーンプレイバック、つなぐ—— 社会と芸術、公演の舞台裏



TOPICS

1. 「藤沢市民オペラ」
2. 「カナガワ ポトガラヒー 出張浅田撮影局 | 開成編・真鶴編」
3. 神奈川県立音楽堂と市民合唱
4. 「黄金町バザール」
5. 「横濱 JAZZ PROMENADE」街角ライブ

14 INTERVIEW

山本理顕(建築家)  
アオキ裕キ(ダンサー／振付家)

16 COLUMN

旅と浮世絵 家田奈穂(平塚市美術館学芸員)

17 連載  
REGULAR FEATURE

18 アートシーンプレイバック  
2025年下半年の美術プログラムをふりかえる  
文：南島 興(批評家)

2025年下半年の演劇プログラムをふりかえる  
文：山崎健太(批評家・ドラマトウルク)

22 つなぐ——社会と芸術  
来日間もない子どもたちに向けたサクソフォン四重奏によるアウトリーチ

23 公演の舞台裏  
照明デザイナー編 久松夕香(照明家)

24 神奈川芸術プレス | 読者アンケート  
ご支援のお願い  
公益財団法人神奈川芸術文化財団 賛助会員・協賛・協力・寄付 ご芳名

公益財団法人 神奈川芸術文化財団について

1993年10月に設立された神奈川芸術文化財団は、以下3つの県立文化施設の運営と、芸術文化の創造・普及に一体的に取り組んできました。2025年4月からはKAAT 神奈川芸術劇場、神奈川県立音楽堂の二つの運営および神奈川県内での事業展開に取り組んでいます。

(休館中)  
神奈川県民ホール



神奈川県民ホール(以下、県民ホール)  
全国屈指の大型文化施設として1975年開館。オペラ、バレエからコンサート、美術展まで多彩な催しの会場として親しまれました。50周年を迎えた2025年に休館。以来県内各地で多彩なプログラムを展開しています。

<https://www.kanagawa-kenminhall.com/>



2026年度ラインアップはこちら  
(4月1日情報公開予定)

[https://www.kanagawa-kenminhall.com/news\\_detail/2986](https://www.kanagawa-kenminhall.com/news_detail/2986)

KAAT 神奈川芸術劇場



KAAT 神奈川芸術劇場(以下、KAAT)  
2011年、モノをつくる(芸術の創造)、人をつくる(人材の育成)、まちをつくる(賑わいの創出)の「3つのつくる」をテーマとする創造型劇場として開館。最大約1200席のホールのほかに、大スタジオ(約220席)と、3つのスタジオを有します。2026年開館15周年。

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281  
TEL: 045-633-6500(10:00~18:00)  
<https://www.kaat.jp/>



2026年度ラインアップはこちら  
(2月26日情報公開)

[https://www.kaat.jp/news\\_detail/2981](https://www.kaat.jp/news_detail/2981)

木のホール  
神奈川県立音楽堂



写真・青柳聡

神奈川県立音楽堂(以下、音楽堂)  
1954年、国内初の本格的公立音楽ホールとして開館。前川國男設計によるモダニズムの名建築、美しい音響の「木のホール」で知られ、数々の名演奏家を迎える一方、県民の音楽体験の場として愛されています。2021年神奈川重要文化財指定。2024年開館70周年。

〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘9-2  
TEL: 045-263-2567(9:00~17:00 月曜休館)  
<https://www.kanagawa-ongakudo.com/>



2026年度ラインアップはこちら  
(3月11日情報公開)

[https://www.kanagawa-ongakudo.com/news\\_detail/2983](https://www.kanagawa-ongakudo.com/news_detail/2983)

# まちと響きあう表現

日々の生活のなか、まちのなかで芸術文化と出合えるように。

神奈川県内には、地域と関わり合いながら、まちのなかへ活動を展開していく様々な取り組みがあります。

本特集では、まちの人々によって支えられてきた市民オペラや県民合唱の歴史、

まちとアーティストがともにつくり上げる写真展、行政・市民・アーティスト・民間企業らが協働で行うフェスティバルなど、

「まちと響きあう」プログラムや取り組みを取材しました。

第25回藤沢市民オペラ《魔笛》(2024年)

\*写真：長澤直子



TOPIC  
1

## 藤沢市民オペラ

50年以上の歴史がある「藤沢市民オペラ」は、全国の市民オペラの先駆けとしてひとときわ輝かしい存在感を放っています。市政、市民、音楽家が連携し合って地域に豊かな文化芸術の土壌を育てるこのプロジェクトについて、運営スタッフと芸術監督の想いを聞きました。

### 多くの人々がつないできた市民オペラの歴史

1973年のスタート以来、50年以上の歴史を紡いできた藤沢市民オペラ。プロの歌手、市民オーケストラ、市民合唱団が三位一体となってつくり上げる舞台は、全国からオペラファンが駆けつけるほど高い芸術性を誇っています。公益財団法人藤沢市みらい創造財団で市民オペラの運営に携わっている竹内康仁さんにお話を伺いました。

「芸術監督に園田隆一郎さんが就任した2015年に大きな変化があり、

私が本格的に関わるようになったのもその頃からです。それまでは5年に2回というペースで開催してきましたが、2015年以降は3年間を一つのサイクルとして、1年目はプロによる公演、2年目に演奏会形式での公演、3年目に本公演というかたちでオペラを開催してきました。制作の体制としては、企画内容を検討する「藤沢市民オペラ制作委員会」とは別に、芸術監督の選考や評価を行う「藤沢市民オペラ芸術監督選考委員会」を設置し、市民の皆さんにとってわかりやすく、透明度の高い組織で運営しています」

オーケストラは100名近い藤沢市民交響楽団、合唱は藤沢市合唱連盟に加盟する50団体以上の合唱団の選抜メンバーからなる大所帯。市民オペラがスタートした当時から参加している方や、親子二代で参加する方もいるとのこと。そこには市民でつくり上げる舞台だからこそ喜びと醍醐味があると竹内さんは語りま

す。  
**市民オーケストラや市民合唱団の熱意が、藤沢の文化芸術の成熟へとつながっていく**

「プロの音楽家のように短期間で仕上げるのではなく、公演の半年以上



第21回藤沢市民オペラ《カヴァレリア・ルスティカーナ》／《道化師》(2010年)

\*写真：岩崎亮

前からゆっくり時間をかけてつくっていくかたちになります。市民の皆さんは、プロを超えようという意気込みで取り組んでいて、幕が開く瞬間まで努力を重ねています。実際には、前日までうまくできなかったことがいきなり本番でできたり、その逆もあったりしてハラハラしますが、アマチュアだからといって一切妥協しない姿勢が素敵だと思うんですね。その経験を、各人が普段活動しているオーケストラや合唱団に持ち

帰ることで全体の音楽の経験値が上がリ、文化芸術の成熟へとつながっていく。それが市民オペラを通して藤沢に連綿と受け継がれているものだと思います」

2025年11月には神奈川県民ホールとの連携事業としてモーツァルトの《羊飼いの王様》を上演。そして2026年3月に控えているロッシニ《ランスへの旅》が、市民オペラのスタート時から舞台となってきた藤沢市民会館の建て替えによる

休館前ラストの公演となりま

す。

「ちょうど神奈川県民ホールも2025年4月から休館に入り、県内各地で様々な事業を展開されているとのことで、オペラの企画で何かご一緒できないかという話になりました。県民ホール主導で制作された《羊飼いの王様》はプロのみによる公演ですが、市民の皆さまに鑑賞機会をご提供する」という意味では、藤沢市民オペラの一環としても位置づけられるものだと思います。そして、市民会館の休館中も市民オペラのプロジェクトは続いていきます。近隣の会場などで公演を行いながら、新しい市民会館が開館した暁にはこけら落とし公演ができる



神奈川県民ホールとの連携事業

《羊飼いの王様》(演奏会形式／2025年)

\*写真：阿部章仁

2015年から藤沢市民オペラの芸術監督を務める指揮者の園田隆一郎さんにもお話を伺いました。

「芸術監督のお話をいただいたのは、大学を出てからイタリアで勉強し、日本とイタリアを行き来しながら仕事を始めた頃。藤沢市民オペラは私にとって、キャリアの初期からともに歩んできたプロジェクトです。プログラミングにおいては《トスカ》や《魔笛》のように市民の皆さんが演奏したい、聴きたいと思うような人気演出を入れつつ、3年間のサイクルの2年目にはロッシニの作品を取り上げてきました。キャストイングも含め、藤沢でしか聴けないものをつくりたいという思いがあります」

第24回藤沢市民オペラ  
《ナブッコ》(2022年)

\*写真：寺司正彦



### 芸術監督の想い

本番前はいつもソリスト、合唱、オペラの皆さんと軽く目を合わせて、最後に園田さんとも目を合わせて、舞台袖から「行ったらっしやい」という気持ちで皆さんを送りだしているという竹内さん。これからも市民オペラのバトンがはたがれていくこと

でしょう。

「藤沢市民会館が休館中だからこそ拓ける可能性もあると思うんです。藤沢市は広いですから、これからのいろいろな場所へ出かけて行って、例えばオペラ以外のオーケストラ曲やミサ曲などにも挑戦できたらと思っています」



園田隆一郎さん

「最初に取り上げたロッシニの作品がいきなり《セミラーミデ》という大作で、あの時代のイタリア音楽ならではの語法を体得するまでは時間がかかりました。けれど今では、私

が何も言わなくても皆さん自然とイタリア的な軽いフレージングで演奏

## カナガワポトガラヒー

出張浅田撮影局ー開成編・真鶴編

取材・文：編集部  
写真：菅原康太（\*を除く）

開成町役場での展示風景。

作品は、快晴茶の茶畑のなかで阿波踊りチーム「宮台連」を撮影した一枚

\*写真：木村雅章

県民ホールが休館中にめぐる神奈川県33市町村でのプロジェクトの一つ、「カナガワポトガラヒー」。写真家の浅田政志さんが神奈川県内を旅しながら、地元の人たちとともに、「神奈川の今」を撮影するプログラムです。2025年は開成町と真鶴町で実施され、12月に写真展を開催。モノクロ写真に手作業で着色する「横浜写真」を手がかりに、撮影が行われました。

「カナガワポトガラヒーの旅のはじまり、はじまり」。浅田政志さんの「演出写真」を通してみる、まちの日常

神奈川県は、日本の写真発祥の地の一つ。その地で、幕末から明治にかけて横浜で行われていた技法を応用し新たな試みを展開する浅田政志さん。幕末の写真師の気持ちに寄り添いまちへ出かけ、地元の人々との出会い、ともにつくり上げる旅をスタートしました。プロジェクト名の「ポトガラヒー」とは、写真が日本に上陸した当時のフォトグラフィーの呼び方です。

2025年の舞台となったのは開成町と真鶴町です。まちの産業や伝統的な仕事の風景、音楽や踊りのチーム、酒屋に集まる人々、子どもが遊ぶ様子などからシーンをつくり、各10枚を撮影。写真展のオープニングお披露目会では、被写体となった人々を中心に地元の人たちが集まり、浅田さんとともに撮影をふりかえりました。

町制施行70周年を迎えた開成町の会場は、町役場1階の町民プラザです。「浅田さんとお話して、実際にまちを見ていただくなかで、被写体を選んでいただきました」と山神裕町長。

地元の人たちは、撮影時に「浅田さんから細かく指示があった」と明かします。被写体とコミュニケーションをとりながらポーズや配置をつくり、時には一緒にかけ声を出して盛り上がりながら、時間をかけて一枚の写真をつくり上げていくのが、浅田さんの手がける「演出写真」の特徴です。

一方、真鶴町の会場は元寝具店で現在は空き店舗の「たけや」。撮影のコーディネートに携わったのは真鶴で生まれ育ち、アートプロジェクトなどを手がける平井宏典さんです。下校中の子どもを大人たちが双眼鏡で見守るワンシーンは、浅田さんが真鶴の人たちの世代を超えた交流やその目線に着目したことから生まれました。

平井さんは「ポーズもガッツと決



真鶴町の「たけや」での展示風景。  
 右手にある作品が、下校中の子どもたちを見守るシーンを写した作品  
 \*写真：木村雅章

真鶴の人たちと撮影をふりかえる浅田さん。  
 海と山の文化が混ざり合う真鶴のコミュニティーが感じられる展示に



浅田さんが撮る写真の妙味は、そこに暮らす人や風景、そのまちなしさが一枚の写真にぎゅっと凝縮されているところ。浅田さんは、「被写体の皆さんが自分たちらしいと思える作品を、一緒につくりたい」と話します。

めて、演出が強いだけでなく、なぜか自然な感じがする。真鶴の空気感と合っているなと思いますね」と話します。

**地元の人たちと、そのまちらしさをつくる。たった一枚の写真に込める思い**

浅田さんが撮る写真の妙味は、そこに暮らす人や風景、そのまちなしさが一枚の写真にぎゅっと凝縮されているところ。浅田さんは、「被写体の皆さんが自分たちらしいと思える作品を、一緒につくりたい」と話します。

**「神奈川の今を生きる人々」と出会い、撮ること**

浅田さんがカメラを持って知らない



浅田政志さん

いところに行き、そこで暮らす人々に出会い、その暮らしぶりを知る。そうして生まれていく作品は、まちの新しい見え方を提案しているようでもありました。

神奈川のプロジェクトだからこそ、昔の「横浜写真」のようにモノクロ写真に着色する方法をとっているという浅田さんは、「着色のいいところは、注目してほしいポイントやカラーにすべきところだけに色が塗れること」と言います。実は、服や空の色が実際とは異なっている写真もあり、地元の人たちもできあがった写真を見て、「また違った雰囲気を感じられて面白い」と話していました。

そして、浅田さんはこう続けます。「今ある写真も時が経つと見え方や必要性が変わってくる。だから、その時生きている人たちの貴重なアーカイブになるんじゃないかなと思いつながり写真を撮っています」

## 「写真家 浅田政志 トーク&中井編作戦会議」レポート



「中井ならここは外せない」というシーンを教えてほしいんです」と浅田さん

今後、浅田さんが訪れる候補としているのは神奈川県西部に位置する「中井町」です。中井町ではどんなシーンを撮影するのでしょうか？ 真鶴町でのオープニングお披露目会終了後、浅田さんとスタッフ一行は「写真家 浅田政志 トーク&中井編作戦会議」へと向かいました。

会場となった「なかい里都まちCAFÉ」には、10人ほどの町民が集まりました。なかには戸村裕司町長の姿も。始めに浅田さんが、写真家としてのこれまでの活動を紹介しました。続いて、すでに撮影を行った開成町と真鶴町で撮影した写真を見せながら、まちの人から話を聞いたり、自分で歩いたりして撮影場所や被写体を決めたプロセスを共有します。

中井町の地図が書かれたボードを広げながら、町民が次々と情報を書き込んでいく「作戦会議」が始まると、「蔵島湿生公園は外せない」「先日の火事ではレトロな消防ポンプが活躍した」「このカフェにはおじさんたちが野菜を持ってきてくれる」「デルモ湘南センターは中井とは思えないきれいな」と、町民の発言は途切れません。浅田さんも「調べてもなかなか出てこない情報が出てきますね」とうなりました。

自然豊かで、里山の風景が広がる中井町。どんな写真が撮影されるのか……。ご期待ください！

音楽堂は1966年から「クリスマス音楽会」というシリーズ名で《メサイア》全曲の公演を続けています。《メサイア》は旧約聖書のテキストを歌うオラトリオ(聖譚曲。宗教的な題材による大規模な楽曲)で、合唱が重要な役割を果たします。プロの指揮者、歌手たちとともに、その合唱を担うのは市民合唱団が集まる「神奈川県合唱連盟」です。こうした市民による合唱と音楽堂の歴史的背景を探ります。



第58回クリスマス音楽会  
ヘンデル「メサイア」全曲  
The 58th Christmas Concert  
"Handel: MESSIAH" \*(c) Tomoko Hidaki

取材・文：猪上杉子  
写真：大野隆介(\*を除く)

### アマチュアの合唱が 音楽堂に響きました

「ハーレルヤ、ハーレルヤ」——2025年12月7日、音楽堂にヘンデル作曲のオラトリオ《メサイア》の有名なハーレルヤ・コーラスが響きました。クリスマスシーズン恒例のコンサートとして続く伝統の公演「クリスマス音楽会」、その第58回です。第一線で活躍するプロのソリストとアマチュアの合唱団員が、大塚直哉さんの指揮による神奈川県フィルハーモニー管弦楽団の演奏に乗せて、高らかに歌い上げました。

この公演の大きな特徴が、何十年にもわたり神奈川県合唱連盟(1958年結成、県内アマチュア合唱団の団員で構成される)が合唱を担っていること。今年と同連盟の参加者募集に応えた38名が参加しました。さらに2011年には「音楽堂『メサイア』未来プロジェクト」が開始され、次世代に伝統を伝えることを目的に、県内の高校生に参加を募っています。今年も県立湘南高校、県立多摩高校、法政大学第二高校の合唱部員やOBら64名が参加しました。

合唱連盟の団員と高校生が集まる合同練習の様子。真ん中で歌っているのは、第1回公演から参加している門間さん



この総勢100名以上からなる、神奈川県合唱連盟と「音楽堂『メサイア』未来プロジェクト」の合同合唱団は、公演本番の2ヶ月以上前から12回ほどの練習を音楽堂で重ねました。

第1回公演から1回も欠かさず参加しているバス・パートの門間誠蔵さんは、合唱団「横浜木曜会」に所属、御年91歳です。「隣に並ぶ高校生に、メサイアの宗教的な意味合いを理解してニュアンスを大事にするといいよと話したりしています」と若い世代との共演を楽しんでいました。また、「アンサンブル萌」に所属す

るアルトの渋谷直美さんは、2006年以來ずっと参加しています。「音楽堂は横浜国立大学の混声合唱サークルで合唱祭に出演した思い出もある最高峰の場所なので、ここで歌えることがとても光栄です。毎年一緒に歌う仲間と友だちになれたこともうれしいことです」と語ってくれました。

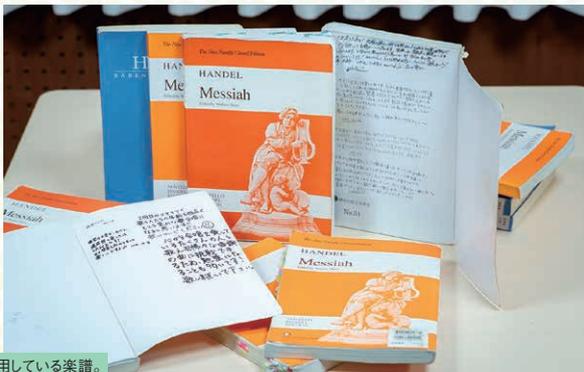
一方、3高校の合唱部長たちは、「人数が少ない部なので、大勢で声を合わせる楽しさを味わえる絶好の機会です」「音楽堂という合唱にとって神聖な場所に立てる喜びがあります」「歴史を感じる建築物に接しながら、音楽堂設立100年への伝統に自分たちが連なることに身が引き締まります」などと話してくれました。また、高校生たちは合唱楽譜を初代から引き継いで繰り返し使用しています。そこには代々の使用者が書き込んだメモが連なっており、演奏のための貴重な情報共有ツールです。

### 音楽堂での《メサイア》の歴史には市民の情熱がこもっています

1954年12月、開館間もない音楽堂で初めてヘンデルの《メサイア》が演奏されました。それは民間団体主催による、東京藝術大学音楽学部を中心とした合唱団による合唱での公演でした。その後1966年から、音楽堂の主催になり、その第1

回の出演者は、指揮者に山田和男、管弦楽は神奈川交響楽団、合唱には横浜木曜会、横浜オラトリオ協会、フェリス女子学院短期大学合唱団、関東学院大学グリーククラブなどアマチュアの8つの合唱団が連なりました。音楽堂での第1回公演から市民合唱団によって合唱が担われてきたのです。

それは当時の市民の間での合唱の高まりが影響したと考えられます。戦後の日本では、全国的に「うたこえ運動」（合唱による労働者の音楽活



高校生が代々使用している楽譜。たくさん書き込みや付せんがあるほか、最終ページには次代の高校生たちへの応援メッセージがつけられています

1970年に開催された第5回の写真。山田一雄（第1回では「和男」の名で出演）指揮による「メサイア」公演は、キャンドルを灯す演出がありました\*



動・政治運動）が盛んでした。音楽堂でも、開館3年後の1957年には『第1回横浜うたこえ』の公演が行われています。神奈川県合唱連盟が1958年に結成され、高校、大学、職場、地域における合唱活動も盛んに行われ、「合唱王国」と称されるほど、全国コンクールで受賞する高いレベルのアマチュア合唱団が神奈川県内にたくさん生まれました。

こんな合唱の隆盛の背景と、市民の音楽への情熱が、音楽堂の《メサイア》公演を60年近くも支え続けてきたといえそうです。



「音楽通り」は音楽堂帰りの人々の歌声から名づけられた？

JR桜木町駅から野毛に向かう大通りを横道に入り、音楽堂のある紅葉坂の手前まで続く細い通りは「音楽通り」と名づけられています。この名の由来は、音楽堂の公演終了後の人々が、興奮さめやらぬまま、みちみち交わす歌声が響く通りであったことから自然発生的に呼ばれるようになったとされています。誰からともなく呼んだ通称でしたが、横浜市が募集した「愛称道路」事業で1976年に認定されました。

右ページに登場した門間さんも、「音楽堂は《メサイア》公演が始まった当時『東洋一のホール』と呼ばれていました。声がよく通る、いい音のホールで、出演する側としても、コンサートを聴いた時も感動したものでした」「それに、昔は合唱団のメンバーとともに集まって伊勢佐木町のまちなかなどで歌うこともしばしばしていましたよ」と、音楽堂にもまちなかにも歌声があふれていた風景について話してくれました。昭和の時代、「合唱王国」との異名をとった神奈川の風土と市民の熱気あふれる歌声のパワーがここにも反映されています。

# 黄金町バザール



会期中に開催されたイベント「のきさきアートフェア」。  
地元のマルシェと共同開催でにぎわいました

アートとコミュニティの関係や、アジアとの交流をテーマに、2008年からスタートした「黄金町バザール」。国内外のアーティストが黄金町で制作した、まちとの関わりや地域を反映した作品群に出合えるアートフェスティバルです。2025年は黄金町エリアに、上大岡エリアが加わり、25組のアーティストが作品を展示しました。

取材・文：編集部  
写真：前川俊幸(\*を除く)

「黄金町バザール+上大岡バザール 2025 通過中 We Meet Along the Way」。まち×アートの「おもしろい」に出合おう

黄金町バザールを主催する、特定非営利活動法人黄金町エリアマネジメントセンター（以下、エリマネ）日ノ出町駅から黄金町駅周辺の地域で、アーティストにスタジオを貸して創作をサポートするアーティスト・イン・レジデンス事業に2009年から取り組んできました。黄金町バザールに参加するアーティストたちは、3ヶ月から数年単位でスタジオに滞在して作品をつくり、会期に合わせて発表します。そのため作品にはまちの「現在」が反映され、まち歩きをしながら作品との出会いを楽しめる体験が、黄金町バザールの魅力になっています。

例えば、ステイプ・フロストさんのスタジオ「ココガーデン」。2023年から黄金町にレジデンスをしているステイプさんは、この場所をアーティスト同士やまちの人との交流の場としても開いています。黄金町バザールでは、ココガーデンの壁一面に大きな白地図（黄金町エリア）を貼りました。観客は目を閉じて、木製のピンを白地図の上に立てるようながされます。これは実際にピンを立てた場所（建物）へ行き、



30年以上にわたり、グラスルーツ（民衆の基本的な考え方や文化）のアート活動に携わってきたステイプさん

そこから受けたインスピレーションによって詩を書くミッションが与えられるという、観客参加型の作品でした。

**黄金町ゆかりのアーティストが上大岡会場とコラボするモデルケースも**

上大岡では、黄金町バザールと連携して「上大岡バザール」を開催し、京急百貨店・ウィング上大岡の売場や飲食店、共有スペースなどの空間に作品が展示されました。マップを手に作品を探していくと、日常的な空間のなかに実はアートが潜んでいる、といった状況に驚きました。

百貨店内の1階から3階に移動するエスカレーター横の壁面インスタレーションを手がけたのは、2008年から黄金町エリアに関わりをもち、

京急百貨店×黄金町エリアマネジメントセンターによる、  
2024年から展示の壁面インスタレーション。  
竹本真紀「めぐるトビちゃん」\*写真：Liu Shujia



ウイング上大岡ガーデンコートの机を  
レコードの盤面に見立てたインスタレーション。  
ヌラチャマット・ウィディアセナ「Sit, Spin, Repeat #1 - #9」\*写真：Liu Shujia

現在は日ノ出町にある交流スペース「ステップ・スリー」を運営する竹本真紀さんです。「この壁面は、元々古くなって暗い雰囲気があったそうです。作品を展示することで空間の印象が変わり、京急百貨店の皆さんに喜んでいただけました」と話す竹本さん。京急百貨店からの要望を受け、2024年からシーズンごとに絵を替えながらインスタレーションを制作しています。

## 変化し続ける

### アーティストコミュニティとまち

このようにまちと響きあうアートフェスティバル「黄金町バザール」が続いてきた背景には、この地域の歴史があります。2000年代初頭の黄金町エリアには、250軒を超える特殊飲食店舗（いわゆる違法風俗店舗）が立ち並び、生活環境の悪化が地域の課題となっていました。それを受け2003年に地域住民らが発足したのが、黄金町バザール主催者の一翼を担う「初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会」です。2005年には神奈川県警察本部によって違法風俗店舗が一斉摘発。以降、地域住民、小学校PTA、警察、行政、大学、企業などとともにエリマネも、こ

地域のまちづくりを担うようになりました。

2025年からエリマネの事務局長に就任した山野桂さんは、2020年度からエリマネのスタッフとして、まちの人たちとの会議に出席するようになり、ある時期、まちの人たちから「もうアートでなくていい」といった発言が出るようになったと山野さんはふりかえります。「どういうことだろうと深く聞いていくと、このまちにとってアートがあることは当たり前だから、それ以外のことに目を向けていこうという意図だったんです。地域の方たちにとって、アーティストがいることそのものが日常になっていくのを実感しました」。

エリマネには約300人のサポーター（ボランティアスタッフ）が登録しており、この地域のまちづくりを応援しています。活動の中心になっているのが「まちあるきツアー」で、地域の歴史やまちにあるアートを紹介するツアーは、人気プログラムの一つです。2025年は新たな試みとして「黄金町まちあるきガイドスクール」でガイド

養成を行い、講座を通して新規メンバーも増えました。サポーターのなかにも、黄金町・日ノ出町エリアに住んでいる方が多くいます。アートへの思いや地域活動への興味など、参加の理由は様々ですが、彼ら・彼女らの活躍にも黄金町バザールとまちの結びつきを感じました。

映像作家の吉本直紀さんが制作した約80分間のドキュメンタリー映画『ユートピア、なるものー山野真悟と黄金町、次世代横浜アートシーン』には、黄金町バザールのアーカイブとしても貴重なシーンが収められています。

います。吉本さんは2013年から

数年間、黄金町バザールのコーディネートとして、また記録撮影スタッフとしても関わり、その後レジデンスアーティストになりました。

長年ディレクターとして黄金町バザールを牽引してきた山野真悟さんは、そんな吉本さんが向けたカメラ

のなかで、アートとまちの関係について「理解できなくても、影響を与え合うことができればいい」と語っていました。

2025年のテーマは「通過中（We Meet Along the Way）」。

アーティストもまちも、誰か

来ては誰かが去り、変化していきま

す。ですがその営みが積み重なり、

歴史になっていることを感じた取材

になりました。



黄金町バザール2025でのサポーターによるガイドツアーの一幕。  
高架下スタジオ Site-A ギャラリーでキム・サンドの作品を解説するサポーター

サポーターガイドツアーの一幕。

過去のバザールで制作されたパブリックアートの壁面の写真を見せながら、「一番古い壁画は?」と観客参加型のクイズ形式で盛り上げました



「横濱 JAZZ PROMENADE」街角ライブ

「横濱 JAZZ PROMENADE」は、横浜を基盤として活動する様々な団体の集合体である実行委員会形式で催され、161組ものアマチュア・バンドの演奏ステージを、延べ約250名の市民のボランティアスタッフが運営する、まさに市民による市民のためのジャズのお祭り。2025年のにぎわいをレポートするとともに、これまでの歩みをふりかえります。

取材・文：猪上杉子  
写真：前川俊幸（\*を除く）



2日目の「街角ライブ パレード」は、「FUNK UP BRASS BAND」がグランモール公園 美術の広場を一周しながらパフォーマンスし、最後は横浜美術館の前で演奏。子どもたちも一緒に踊る姿がありました

幸運な161組の  
アマチュア・ジャズバンドが  
街角で演奏を繰り広げました

2025年も横浜の街全体がジャズサウンドで満たされるイベント「横濱 JAZZ PROMENADE」（通称：ジャズプロ）が10月11日、12日に行われました（1日目は雨天のため屋外会場は中止）。1993年に始まったこのフェスティバル、最大時は約15万人（2025年は約9万人）もの来場者を迎える、すっかり横浜を代表する大人気イベントに成長し定着しました。

この日のにぎわいをつくりだしていた大きな要素の一つは、開始当初からの企画「街角ライブ」でのアマチュア・バンドの気合いあふれる演奏の数々。14の会場に出演したのは、約400組の応募者のなかから抽選で選ばれた幸運な161組のバンドです。ジャズを愛好する演奏家たちにとっては、この「ジャズプロ」のステージに立つことが大きな目標であり、またその晴れ舞台を応援することを大勢の観客が楽しみにしているのです。



みなとみらい駅直結の商業施設「クイーンズスクエア横浜」のイベントスペースにて、「みなとみらい Super Big Band」と「金沢ジュニア・ジャズ・オーケストラ JAZZ-21」のコラボレーション・ステージ

両日「街角ライブパレード」と称してオープニングパフォーマンズを行ったのは「FUNK UP BRASS BAND」。ダンサーによる先導で観客を巻き込み、練り歩きながらの演奏には大拍手が起きました。1日目の横浜美術館との連動企画「アルゴリズムでどってみよう！〜パレードパフォーマンス〜」では、「アルゴリズムたいそう」の演奏に合わせて、事前に実施したワークショップ参加者たちも

ダンスを披露し、大いに盛り上がりました。

「街角ライブ」の各会場の整理などにあたっていたのはお揃いのスタッフパーカーで活動する「横濱ジャズクルー」の面々です。公募制のポランティアスタッフで、1993年には70名でスタートしましたが、2025年は1日あたり約130名（2日間では延べ約250名）がステージを支えました。

### ジャズ演奏100年を 記念して 特別企画も発信

そして2025年の「ジャズプロ」には特別企画が設けられていました。当年は、1925年7月1日に横浜・伊勢佐木町の芝居小屋・喜楽座で米国からの7人編成のバンドが初めてジャズを演奏してから100年にあたります。その記念に、横浜市民に広く愛されている《横浜市歌》（1909年誕生）をジャズ編曲した《横浜市歌 JAZZPRO 2025 Ver.》を制作し、吹奏楽編成とビッグバンド編成の楽譜を無料公開したのです。実際、2日間にはあちこ

ちから《横浜市歌 JAZZPRO 2025 Ver.》が聞こえてきました。

2日目に出演した「みなとみらい Super Big Band」は、2013年に横浜みなとみらいホールで結成された中高生によるジュニア・ビッグバンドです。「この横濱 JAZZ PROMENADE のステージで皆さんの前で演奏するのを楽しみに練習してきました」とのあいさつで始まり、4曲目に演奏された《横浜市歌》では、トランペッタやサクソスのソロも交じえた独自のアレンジの演奏を披露、盛大な拍手がわき起こりました。

### 「ジャズプロ」は 街と街の人々に支えられて 歩んできました

「ジャズプロ」が初めて開催されたのは1993年のこと。「街全体をステージに」は第1回からの合言葉です。2019年には台風の影響のために開催中止となり、2020年と2021年は新型コロナウイルス感染症蔓延のために配信での開催となるという困難な3年を乗り越えて、33年もの年月を重ねてきました。第1回の総来場者数は2万9000人でしたが、過去最高の2014年は15万人を超えました。また、横浜市内の街なかの商業施設や広場などで

も音楽が聞こえてくるのが大きな魅力として認識されています。規模の点でも街ぐるみというユニークさの点でも、全国的に見ても非常に人気の高いジャズ・フェスティバルの地位を長きにわたって誇っているのです。

「ユニークさ」をもう少し説明すると、それは開始当初から市民とミュージシャンと企業と文化団体が一体となって企画し、運営されてきたこと。主催者は「横濱 JAZZ PROMENADE 実行委員会」という名の集合体で、公益財団法人 横浜芸術文化振興財団や横浜 JAZZ 協会、文化施設、市内のジャズ祭などの団体により構成されています。

こうした市内の様々な立場の団体が一致団結してのプロジェクトは、1993年当時にはまだ珍しく画期的な試みだったといえます。また、横浜を中心とした多くの協賛企業、一般公募で集まった市民ボランティアスタッフ、横浜市内各地域で開催されるジャズフェスティバルのスタッフが丸となって、横浜市と協働して支援してきたことが、33年の継続と成功をもたらしたといえそうです。このフェスティバルの大

きな魅力となっている「街角ライブ」への出演を希望する応募者は近年一層増加し、そのパフォーマンス力は年々増し、熱の入った演奏は来街者たちを大いに楽しませています。「運営がしっかりとれているのでいいステージにしてみたい」「ジャズと横浜の街の景色がぴったりなので楽しめる」「観客の盛り上げ方がうまくて気持ちよく演奏できる」——こうした出演応募者の声が、「市民のための市面をよく表しています。これからも横浜の地に根づいたこのお祭りは、しっかりと地域に支えられながら続いていくことでしょう。」



1994年開催時の様子。横浜市開港記念会館にて、「ジョージ川口ニュー・ビッグ・フォー」の演奏風景  
\*提供：横濱 JAZZ PROMENADE 実行委員会

地域コミュニティとともに建築を捉え、建築における公共性を追求し続けている山本理顕さん。

2025年7月19日～11月3日に開催された

「山本理顕展 コミュニティと建築」の会場であり、神奈川県内の代表作の一つ

「横須賀美術館」について、また建築家として日頃考えていることについて聞きました。

横須賀美術館の個展を拝見しました。展示からはもちろんですが、あらためて美術館があることで横須賀の自然や風土をより一層感じることができました。まさにそれが建築の役割なんです。今回、自分の設計した美術館で個展を開催できたことは大変光栄なことでした。同美術館では建築家による初めての展覧会で困難もありましたが、横須賀市長の上地克明さんにも協力を仰ぎ、実現できました。設計時には、建設そのものへの反対や博物館法の厳しい制限など、様々な矛盾を抱えながらも、上地さんや当時学芸員だった原田光さんらの尽力によって誕生した、希少な美術館です。

展覧会は模型と解説を中心にしたり、くりで、建築展としてはとてもオーソドックスながら、よい展覧会を観たあとの満足感がありました。

あらゆる芸術活動は社会のルールのおかげで行われます。芸術家はそれに従って世界や社会を壊すのではなく、人を幸せにしなければいけないと思っています。展覧会であれば、展覧会の作法に則って表現する必要があります。暴力的であったり、犯罪に近い行為を含むものは、芸術活動としては成り立ちません。ちなみに出品した金属模型は実は接着剤ではなく、はんだづけで制作しているので、そ

## 山本理顕 Riken Yamamoto

建築家



美術館があることで

横須賀の自然や風土を感じられる。

それが建築の役割

### PROFILE

主な作品に GAZEBO、埼玉県立大学、公立はこだて未来大学、横須賀美術館、ザ・サークル チューリッヒ国際空港、名古屋造形大学など。国内外で公共建築を手がける。著書に作品集『コミュニティと建築』（平凡社）など。2024年ブリツカー賞、2025年クリスタル・アワード受賞。



豊かな緑と海に囲まれている横須賀美術館の「山の広場」からの展望  
\*画像提供：横須賀美術館

\*1 「1つの住宅に1家族」というモデルに代わる、多世代・多様な人々が緩やかにつながり、生活に必要な衣食住などを共有・分担する社会のモデル

聞き手・文：南島 興 写真：加藤 甫(\*を除く)

れ自体が一つの作品として鑑賞できます。それも満足感の理由でしょうね。

—— オーソドックスであることは、権威を尊重することにもつながると思います。

古代の英雄や哲学者がそうであったように芸術活動だけではなく行政、政治においても本来、権威に基づいて行われます。しかし、他者とのつながりを失っている現代社会ではそれが難しい。権威者は他者との関係のなかでおのずと生まれるからです。他者とのつながり、ともに生きる一つの方法として私が提唱しているのが地域社会圏<sup>1</sup>です。

—— 「地域社会圏」のようなビジョンをもつにはどうしたらいいでしょうか。

ビジョンをもつことは大事ですが、それをどう他者に届けるのかを考えなければいけません。偉そうに言えば、芸術家や建築家とはそういう職業なんです。建築家ならどうしたら人々を幸せにできるのか、これを考えて仕事をするのが大切です。

ダンサーのアオキ裕キさんが、路上生活経験者らとともに結成したダンスグループ「新人Hソケリッサ!」。2022年からは横浜市・寿町を拠点にした活動を開始。一人ひとりがもつ多角的な表現のあり方を大切に、様々な環境で生きる人々に向けて、無料のワークショップやパフォーマンスを行っています。アオキさんにお話を伺いました。

ソケリッサと寿町の関わりについて教えてください。

ソケリッサのメンバーは路上生活経験者です。だからこれまで、いわゆる「ドヤ街」と呼ばれるところでもパフォーマンスを行ってきました。するとやはり、「自分もやってみたい」という人がいるんですよね。我々の活動を潜在的に求めている人たちがいるかもしれない。そうした考えから寿町を拠点にしました。それに横浜はアートに対して肯定的で、市にぎわいスポーツ文化局の方がサポートしてくださったりと、すごく協力的なんです。定期的なワークショップとパフォーマンスを行うことで、年齢や経験に関係なく、「踊りたい!」と思ってもらえたらうれしいです。

アオキさんは「生きること」に日々向き合う身体をテーマにされています。留学先のニューヨークで、9・11に遭遇した経験が大きく影響しているそうですね。

自分の価値観のすべてが崩壊するほどの衝撃的な体験でした。まじがパニック状態で、人々の悲しみや怒りの感情であふれている。それまでの僕は一人の表現者として、人間の内側にアプローチしたことがありませんでした。踊りに関しては表面的なカッコよさや、うまくリズムに乗ることばかり考えていた。そんな

## PROFILE

「新人Hソケリッサ!」主宰、ダンサー・振付家。

生きることと直面する身体表現を探索。

路上公演を通じ、芸術にふれる機会のない人々へ表現を届けている。

2004年NEXTREAM21最優秀賞。

コニカミノルタソーシャルデザインアワード2016グランプリ。

神奈川県立神奈川総合高等学校 舞台芸術科・身体表現非常勤講師。

誰しもが内に秘めている、人間の本质を探索する



ダンサー／振付家

# アオキ裕キ Yuuki Aoki

自分のスタンスに愕然がくせんとしましたね。人間は誰しも凄まじいものを内に秘めている。ソケリッサの活動を通して迫ろうとしているのは人間の本质なんです。

ソケリッサの活動開始から20年が経ちました。今後の展望をお聞かせください。路上生活をされている方に声をかけ、あの程度のかたちになるまで必死でした。でも今は継続して一緒にパフォーマンスができるメンバーがいて、様々な企画や教育機関などからも声がかかるようになりました。台湾でもインドでも踊りましたし、思い描いていたものが実現している実感があります。それと同時に、このままでいいのかと自問している自分もいる。資本主義のルールのなかで生きていくと、どうしても視野が狭くなったり、考えが凝り固まってしまうりするものですから。この2026年にはマレーシアの「ブナン」という狩猟採集民の方々のもとに滞在する予定です。そこでまた新たな視点を得られたらなと。



2024年10月24日 第3回寿町ダンスパフォーマンス \*写真：岡本千尋

聞き手・文：折田侑駿 写真：加藤 甫(\*を除く)

## 旅と浮世絵

家田奈穂(平塚市美術館学芸員)

学習院大学大学院人文科学研究科哲学専攻修了。専門は日本近代美術史。都内の私立美術館で約10年浮世絵展を担当し、2014年から現職。現在は主に近現代の日本画家の展覧会を担当。



歌川国芳「相州江之嶋之図」  
画像提供：電子博物館みゆネットふじさわ

歌川国芳『相州江之嶋之図』(藤沢市藤澤浮世絵館蔵)は、波に洗われてこつこつとした岩肌を見せるボリュームのある江の島を、海側から一望するように描きだしている。多くの人が見慣れた陸側からの眺めではなくその奇怪な相を強調した点に、国芳の着想の妙がある。画中各所に「上ノ宮」「岩屋」などの書き込みがあり、江の島参詣において見るべき場所を明示するとともに、岩場には豆粒のようなサイズで参詣者を描き、江の島の壮大さを印象づけている。

今も都心から日帰りできる行楽地として人気のある江の島は、江戸時代の半ば以降、江戸市中の人々と

とつても人気のある参詣地で、巳年と亥年に行われた弁財天の開帳にあたって多くの参詣客が訪れた。無論、当時の江の島行きは今と違って泊まりがけ。江戸からの往復で3泊4日の旅程であったという。

実は庶民が旅をするようになったのは、江戸時代も半ばを過ぎてからのこと。元々庶民には、商用や寺社参詣、訴訟といった限られた目的のしか旅が許されていなかったのだが、18世紀後半に入って寺社参詣を名目とした物見遊山の旅が流行しはじめ

性が高まったこと、また、1802年に刊行が始まった十返舎一九『東海道中膝栗毛』(弥次郎兵衛と喜多八が、東海道を江戸から伊勢神宮へ参詣する道中を二人の軽妙な語り口で描写した滑稽本)が大ヒットしたことなどが、旅行ブームの背景として挙げられる。

とはいえ、今のように頻繁かつ気軽に旅に出ることが叶わないのも事実で、せっかく出かけるのならば足を延ばして鎌倉も、風光明媚な景勝地として知られた金沢八景も、もう少し欲張って大山参詣も、と加える

と1週間程度の旅程となったようだ。その間には街道筋における飲食や旧跡めぐりも大いに楽しんだことであろう。

人々の関心を反映するように、街道や名所を主題とした風景画が次々と生みだされた。そもそも浮世絵は、リアルタイムの流行を描きだす町人の芸術として始まったもので、その発生当初から評判の遊女や人気の歌舞伎役者といった同時代人物の描写に重点が置かれていた。18世紀半ばには、江戸市中の人々の生活風俗も盛んに取り上げられるようになり、それにとりもって背景描写にも相応の現実感が求められて風景表現が充実していく。そして天保年間(1830〜1844)に葛飾北斎『富嶽三十六景』、歌川広重『東海道五拾三次之内』(保永堂版)が刊行されたことで、新たに風景画のジャンルが確立し、東海道などの街道を描く街道絵(道中絵)や、江戸や各地の名所を描く名所絵が盛行するようになった。

歌川広重『東海道五拾三次之内 川崎 六郷渡舟』(国立国会図書館デジタルコレクション)は、あたかも自身が街道を行くかのような臨場感をもって描きだされている。玉川(多摩川)の河口付近は六郷川と呼ばれ、東海道の渡し場として往来が多かった。西に向かつて積雪の富士を望み、渡し船には旅装の男女。ここから東海道をまっすぐ西に向かうのか、あるいは川崎大師へ寄り道するか、悩みどころであったろう。この作品を見てわかるように浮世絵の風景画は、単に風景を描写するだけでなく、地元の名物や生活、往来する旅人の様子など、土地の特徴や見どころといった情報とともに描き込むことが多かった。浮世絵が、その発生当初から世間の出来事を描くことに傾注してきたことを思えば自然な成り行きといえる。

ところで、浮世絵師は、必ずしも実景を自分の目で見て描いたわけではない。ここに紹介した広重は、江の島などの神奈川県域に向いているとはいえず、次々に仕事の舞い込む売れっ子浮世絵師に、遠隔地を旅する時間的な余裕はなく、絵の着想

源として、各地を実地で調査して編纂された地誌「名所図会」が参照されることもあった。「江戸名所図会」には、川崎や金沢、保土ヶ谷といった神奈川県域も取り上げられており、それぞれの土地の寺社仏閣、ゆかりの故事、見どころが文章で説明されるとともに、著名な景観や故事は挿絵つきで紹介されている。地誌とはいえず、今のガイドブックのような機能をもっていたといえよう。浮世絵の風景描写は、名所図会の墨一色の挿図を、色彩豊かな景観表現へと昇華させ、名産、名物、同時代風俗を盛り込んで描くことで、その土地のイメージをヴィジュアルで端的に示すものであった。そうであるからこそ、帰宅後の旅の思い出のアルバムとして、あるいは旅に出ようとする人の旅情をかき立てるものとして、多くの人の支持を得たのだろう。



広重『東海道五拾三次 川崎 六郷渡舟』保永堂・国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1309887> (参照2026-01-16)



# REGULAR FEATURE

---

本誌では、毎号以下のコンテンツをお届けします。

## アートシーンプレイバック

横浜から平塚、横須賀まで、様々な場所で開催された「美術プログラム」と、毎年開催の「横浜国際舞台芸術ミーティング(YPAM)」で多くの作品がみられた「演劇プログラム」から、県内の2025年下半期のアートシーンをふりかえります。



## つなぐ — 社会と芸術

あらゆる人たちが芸術文化に親しむことができるよう、神奈川県内の文化施設や団体では様々な取り組みを行っています。インクルーシブなアプローチを中心に、社会と芸術をつなぐ事例をご紹介します。



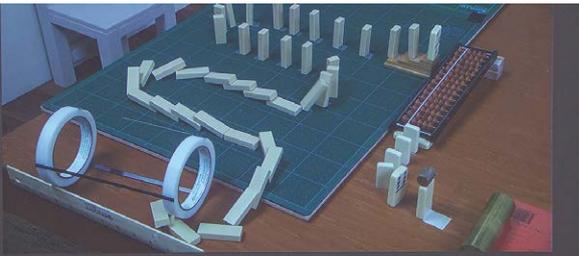
## 公演の舞台裏

普段は縁の下の力持ちとして様々なかたちで公演を支え、「舞台裏」で活躍するスタッフの技術やその仕事について取り上げます。今回は[照明デザイナー編]をお届けします。

## 2025年下半期の美術プログラムをふりかえる

2025年下半期の神奈川県内では、作家性が強く印象づけられる展覧会からなじみのある風景を題材にした個展、私的な経験をもとに壮大な世界を表現するインスタレーションまで、様々な美術展が開催されました。

文：南島 興（批評家）



### 横浜美術館リニューアルオープン記念展 「佐藤雅彦展 新しい×(作り方+分かり方)」

誰もが知る、知られざる「表現者／教育者」の佐藤雅彦による世界初個展。「ピタゴラ装置」の実機展示なども織り交せて、初期の広告の仕事から近年の教育活動までを一望する内容で、大変なにぎわいを見せていました。最も見せたいのはタイトルどおり、その創作の裏にある創作のルールでした。自分が知らないものをつくるための方法の発明家が佐藤雅彦なのです。本展を通じて鑑賞者は創作の楽しさとともに、自分が創作するための物差しをいくつも手に入れたことでしょう。

会場 | 横浜美術館 日程 | 2025年6月28日～11月3日 主催 | 横浜美術館、TOPICS

この夏、来場者数でいえば大変な成功を収めた展覧会は、作家自身が表立つことに極めて控えめな佐藤雅彦の個展でした。「別のルールで物を作ろうと考えている」という佐藤の言葉をもとに、電通時代の広告業からピタゴラススイッチの発案、そして大学での教育活動までをたどりながら、その裏に走るルールの正体が明らかにされていきました。しかし、それは作家名ではなく、ルールが表に立つこと、それ自体が佐藤が自らに課した最大のルールだと受け取るべきなのでしょう。

また同会場と同じく現代の表現を扱った「横浜トリエンナーレ」が世界の観客に向けて「アナーキズム」を思わせる政治性を包み隠さず表明していたとすれば、あくまでも国内の老若男女を対象とし政治性から最も離れたところにある創作物を、それもまた現代を代表する芸術であると見て見せることは横浜美術館らしい企画展の幅の広さを示していました。佐藤がルールなら、空間から世界を見るのが、平塚市美術館で個展を開催した原良介です。原の作品にはイメージと余白や図と地を等価に扱

い、物理的なものの大小を入れ替えたりすることによって生まれる独特な空間性があります。本展では展示壁の一部を絵画の余白として見せたり、展示室に配された磁器作品が周囲の空間を借景とすることで、この特徴が展示空間全体へと拡張されていました。つまり原にとつての空間認識は作品の素材や絵画、磁器といったジャンルの違いを軽々と超えてしまうということです。ひととき大きな存在感を放つ『金目海岸』は個別の作品と展示空間の両方のスケールを行き来する原の柔軟性を

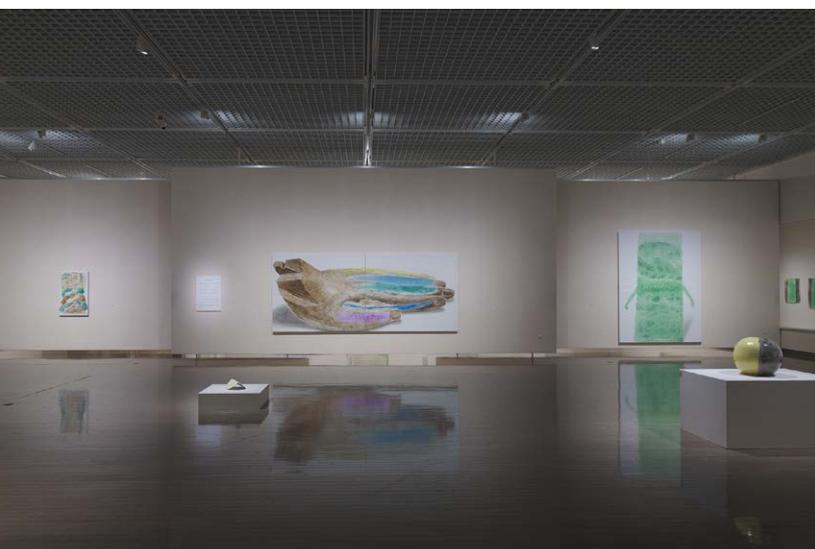


佐藤雅彦展「ピタゴラ装置」の実機展示 写真：竹久直樹

### 「原良介 サギ子とフナ子 光のそばで」

平塚出身の原良介が長年取り組んできた絵画と立体を中心に紹介する個展。その作品は表題のサギやフナ、また身近な風景や生物などの素朴で親しみやすいモチーフと、油絵具にもかかわらず下地を塗らないことで生まれる、透き通った色彩が特徴です。近年のアーティスト・イン・レジデンスやアートプロジェクトの成果を含めて、デビュー作から近作までに通じる、原なりの空間が作品という単位を超えて、展覧会というメディアでも存分に発揮された展覧会といえます。

会場 | 平塚市美術館 日程 | 2025年6月14日～9月15日 主催 | 平塚市美術館



画像提供：平塚市美術館

## 「大小島真木展」 あなたの胞衣はどこに埋まっていますか？」

メキシコでの出産を経た大小島真木(大小島真木+辻陽介)が胞衣(胎児を包む羊膜と胎盤)というシンボルをもとに制作したインスタレーション展。暗闇の会場には世界各地で収録した音声流れ、大きな壁画とメキシコの土着的な習俗を思わせる人形や TENT、大樹のモニュメントが点在していました。私的な経験と生命の起源のような壮大な出来事を重ねるのは芸術家らしい想像力に映りますが、それは本来、あらゆる人間に備わった能力だと思えてくる展示でもありました。

会場 | KAAT 神奈川芸術劇場  
日程 | 2025年9月21日～10月19日  
主催 | KAAT 神奈川芸術劇場



Photo by Norihito Iki

## 「山本理顕展 コミュニティーと建築」

建築家・山本理顕の設計した横須賀美術館での個展。主に模型、図面、写真、解説を使って住宅から大規模な公共建築までの幅広い山本の活動を、自身の参照してきた哲学者などの言葉を導き手にして紹介する構成。あえて中心を見いだすとすれば、チューリッヒ国際空港の複合商業施設ザ・サークルと地域社会圏の構想模型でしょうか。これらの展示を通して、森を背にして東京湾に面した海岸の地形に合わせた横須賀美術館の設計思想を、その場で再発見できるぜいたくな展覧会でした。

会場 | 横須賀美術館  
日程 | 2025年7月19日～11月3日  
主催 | 横須賀美術館、一般社団法人地域社会圏研究所

山本理顕展「地域社会圏モデル」展示風景  
画像提供：横須賀美術館



再び、絵画に落とし込んでみせる異色の一点だったといえるでしょう。作家には原にとつての平塚市内のようになじみのある風景を題材にする人もいれば、その真逆の人もいます。大小島真木+辻陽介のユニットである大小島真木は異国メキシコでの出産という実体験をもとに KAAT の劇場空間に巨大なインスタレーションを出現させました。大地や森というある土地や国の固有性

ART

に結びつけられやすいモチーフを扱いつつも、壁画やオブジェには異種混濁（ごんごう）の感覚が漂います。それは大小島がメキシコにとどまらず、諏訪（すわ）やインドなど各地で制作してきたことの賜物かもしれません。異質な経験という意味では、2025年6月にオープンした「Center NEW S「NEW PLATFORM」」はアジアのアートコレクティブとオルタナティブスペースが集うフェアが突如、新高島駅の地下に出現するという企画で、こういう不思議な出合いの場所こそ、横浜らしいと感じました。

佐藤雅彦の控え目な態度はルールであり、表現者としていかに振る舞うべきかという創作の倫理と呼べるものでもあるでしょう。建築家の山本理顕が設計した横須賀美術館での個展は、図面、模型、写真、解説といった建築展としては極めて古典的な展示手法がとられていました。予算の制約があるにしても、これは山本のオーソドックスさを尊重する態度として受け取るべきだと思いました。時にそれが過去の形式を重んじるという意味で権威的に見えたとしても、人に届けるための作法（しよ）を律儀に守ろうとする、山本の建築家としての倫理を確かに感じる展覧会でした。

## 2025年下半期の演劇プログラムをふりかえる

毎年11月～12月に行われる「横浜国際舞台芸術ミーティング(YPAM)」が、2025年も横浜で開催されました。その会場の一つでもあるKAATの主催公演、新たな形式を導入したYPAMディレクション、そして神奈川県内の公演を公募制で紹介するYPAMフリンジのプログラムから、現代の演劇シーンをふりかえります。

文：山崎健太(批評家・ドラマツルク)

### ■ アユ・プルマタ・サリ×ハシマ・ハリス『Batu』

石を意味するBatuというタイトルは東南アジアのマレー系家庭において調味料サンバルをつくるのに使うすり鉢とすりこぎの材質から。材料をすりつぶす動きは女性の身体への振り付けとなり、調理のための空間は女性同士で知恵を共有し継承する場となります。今回の上演では観客も調理に参加し、実際にサンバルが振る舞われる場面も。完成版は2026年に初演予定。

会場 | 急な坂スタジオ

日程 | 2025年12月9日

主催 | 国際交流基金、横浜国際舞台芸術ミーティング実行委員会



写真：引地信彦

### ■ KAAT 神奈川芸術劇場プロデュース

### 『最後のドン・キホーテ THE LAST REMAKE of Don Quixote』

ドン・キホーテを演じる役者が自らをドン・キホーテと思い込んでしまうという設定で演劇ならではの『ドン・キホーテ』リメイク。ケラリーノ・サンドロヴィッチが大倉孝二にやらせたかったというドン・キホーテ(役名としてはクリンクル)は飄々ととぼけつつ、しかしどこか寂しくもある風情がハマリ役。しかし妄想が現実と通じてしまう世界を、今の私たちは果たして他人事と笑っていられるでしょうか。

会場 | KAAT 神奈川芸術劇場

日程 | 2025年9月14日～10月4日

主催 | KAAT 神奈川芸術劇場



写真：前澤秀登

シーズンタイトルとして「虹」RAINBOW」を掲げたKAATの2025年度メインシーズンはKAAT神奈川芸術劇場プロデュース『最後のドン・キホーテ THE LAST REMAKE of Don Quixote』で幕を開きました。セルバンテスの小説『ドン・キホーテ』で描かれた虚実の狭間を生きたる男の物語をケラリーノ・サンドロヴィッチがリメイクしたこの作品では、大倉孝二が自らをドン・キホーテと思い込む役者を演じます。大いに笑っているうちに浮かび上がってくるのは現実そのもののナンセンスさにほかなりません。分断と戦争が気づけば「向こう側」の話ではなくなっている。そんな空恐ろしさも感じさせる作品でした。

「虹」が象徴する多様性や異なる文化・人との架橋を模索し実現する場として長年にわたって重要な役割を果たしているのが、KAATもメイン会場の一つとなっているYPAMです。2025年も国内外の多くの舞台芸術関係者が集いました。

上演プログラムの軸となるYPAMディレクションは今回から形式を刷新し、実験的なプロジェクトのプレゼンテーションとディスカッションから成るフォーラムへ。アユ・プルマタ・サリ×ハシマ・ハリス『Batu』をはじめとするインドネシア・シンガポール・台湾・タイ・ベルギー・日本

拠点のアーティストのプレゼンテーションは、ジェンダーやセクシュアリティ、身体の集会的／個的なあり方などをテーマに展開しました。単に作品を上演するだけでなく、時間と空間を共有し、思考と対話を積み重ねるための場をつくりだせることは現代における舞台芸術の大きな意義の一つです。

ここからは公募制で国内外から多くのアーティストが参加するY P A M フリンジで上演されたプログラムを紹介。かもめマシーン『南京プロジェクト vol.9』と鳥公園『泳ぐ彼女は果てを見ている（リーディング公演）』はそれぞれ、南京大虐殺と「からゆきさん」（東南アジア等に渡って娼館で働いた日本人女性）についての長期にわたるリサーチの成果として上演されました。共通しているのはどのように加害や差別などの負の歴史を引き受け、現在に接続できるのかという問いです。一方、趣向『わたしの隣人』は台湾にルーツをもつ劇作家オノマリコの視点から「隣人」としての「日本人」を問い直しました。

果てとチーク『だくだくと』とbits『Which Witch』（『MAMA』と連続上演）はどちらも魔女狩りを一つのモチーフに、排外主義やフェミニズムへのバックラッシュが強まる社会への抵抗を試みます。若い世代のこのような取り組みには頼もしさを感じつつ、上の世代としての責任も考えざるを得ません。



画像提供：鳥公園

### 鳥公園 『泳ぐ彼女は果てを見ている （リーディング公演）』

からゆきさん視点の物語として構成された本作では、和田華子と稲継美保という二人の俳優が複数の世代・複数の役を演じ、加害／被害の二項対立では割り切れない生のありさまと彼女らを描いている構造を現代と地続きのものとして描きだしました。他者からのジャッジを拒む「当事者」の言葉も印象に残っています。今回はリーディングということで小さな会場での公演でしたが、時期は未定ながら本公演も予定されているそう。

会場 | 八番館  
日程 | 2025年12月11日～12月13日  
主催 | 鳥公園

### ザジ・ズー『ザジ・ズー現代贋作劇場』

ザジ・ズーの特徴の一つがその時々のメンバーによる集団創作。演劇に限らず古今東西様々な作品のパロディをコラージュした本作でも、台本を書きたいメンバーがそれぞれに短い場面を書き、それをもとに稽古をしながら全体をつくり上げていったとのこと。みんなでわいわいだったその「空気」がそのまま上演に表れているからこそ、集団としてのザジ・ズーもその作品も、多くの人を惹きつけるのかもしれない。

会場 | ザ・シティイ  
日程 | 2025年12月13日  
主催 | ザジ・ズー



写真：星 ヒナコ

PLAY



ワークショップと演奏の様子。子どもたちとコミュニケーションをとりながら進められました



取材・文：編集部  
写真：加藤 甫

## 来日間もない子どもたちに向けた サクソフォン四重奏による アウトリーチ

会場 | 横浜市日本語支援拠点施設「ひまわり」(通称：ひまわり教室)  
日程 | 2025年7月4日  
主催 | 公益財団法人 神奈川芸術文化財団

### ● 日本語支援拠点施設「ひまわり」とは？ ●

2017年に横浜市で初めて開設された、来日して間もない児童生徒に初期日本語指導や学校生活体験などを行う日本語支援拠点施設。年間約200名の外国籍または外国につながる児童生徒が通っています。子どもたちは地域の公立学校に在籍し、来日直後の1ヶ月間、月・火曜は在籍校、水～金曜はひまわり教室に通学し、日本の生活や学校に慣れるための基礎的な日本語や学校生活でのルールなどを学んでいます。

### ● 社会連携ポータル課の取り組み ●

「芸術文化をより多くの方の身近に、そしてこれからもっと楽しんでいただきたい」という思いのもと、社会と芸術文化をつなぐ窓口として、鑑賞サポートや人材育成、教育施設や地域でのアウトリーチなど様々な取り組みを行っています。「教育との連携・協働」「インクルーシブな取り組み」も重要な役割となっています。

日本語支援拠点施設「ひまわり」の金澤眞澄校長(上)  
前原奈名子先生(下)



神奈川芸術文化財団の社会連携ポータル課が、「鑑賞機会が少ない人たちに芸術を届けること」をテーマに企画した、社会教育との協働事業。2025年の夏、来日して間もない児童生徒が通う日本語支援拠点施設「ひまわり」(通称：ひまわり教室)で、サクソフォンカルテット「NOK Saxophone Quartet」(以下、NOK)によるアウトリーチが行われました。

会場には、ひまわり教室に通う小学生・中学生17名と職員らが参加。ルーツのある国は、ネパール、フィリピン、中国、アメリカなど様々。「この鳴き声の動物、何でしょう?」という演奏者からの問いかけとサクソフォンの音に、児童生徒からは「ぞう!」「らいおん!」という声。プロジェクターのパネルに、アルファベット

やひらがな、イラストで答えが示されます。演奏者とコミュニケーションをとりながら、街や波の音をモチーフにした音楽などを鑑賞。子どもたちが立ち上がり、手拍子で演奏に参加する場面もありました。

NOKのメンバーは、『音楽を通じて気持ちは伝わるんだよ』というメッセージが伝わっていたらうれしい』と話します。プログラムをつくるなかでは、ひまわり教室の職員を交えたリハールが行われ、「言葉は少なく、はつきりと話す」「フォントは教科書体にする」などのアドバイスを受けたそうです。さらに、児童生徒とのコミュニケーションのとり方を学ぶため、事前にひまわり教室の授業を見学。同行していた企画担当者は「ひまわり教室の職員の

方と一緒にプログラムをつくれたことがとてもよかった。アーティストにとっても、とても有意義な経験になったと思います」と事業をふりかえりました。

ひまわり教室の金澤校長は「手拍子をするなど、子どもの目線に立ったことをやっていただいた。いつも以上に子どもたちが輝いていました」と話します。前原先生も子どもたちの様子をふりかえり、こう語ります。「サクソスを見て『長い!』と書いていたように、驚きの言葉として日本語が出ていたのが印象的でした。音楽の大きな音量にびっくりする体験から、一緒に楽しむという流れでやっていたら、音楽を楽しく体験できたのではないかと思います」。

# 公演の裏舞台

## 照明デザイナー編

聞き手・文：河野桃子 写真：加藤 甫(\*を除く)

※本インタビューのロングバージョンはWEBに掲載しています。

照明家

## 久松 夕香

[ひさまつ・ゆうか] 照明家。バレエ団「ネザーランド・ダンス・シアター(NDT)」で照明チーフと照明デザイナーを務めたのち、フリーランスの照明デザイナーとして独立。2016年に日本照明家協会新人賞、2022年に同協会奨励賞を受賞。2021年に文化庁新進芸術家海外研修員として渡欧。



作品への関わり方やその楽しさについて話す久松さん(左)、照明チーフを務める時に愛用しているヘッドフォン(中央)、久松さんが照明を手がけた作品「Codes of Conducts」(振付：Jermaine Spivey)(右)※ Photo: Rahi Rezvani

舞台作品を支える専門家を紹介する本コーナー。今回は、2021年に渡欧し、ネザーランド・ダンス・シアター(NDT)をはじめヨーロッパで照明家として働く久松夕香さんにお話を伺います。日本からオランダへ。久松さんが求めるコンテンツポラリティ作品の照明のあり方とは？

——なぜ海外で照明家として活動するようになったのでしょうか？

照明は学生の時にアルバイトで始めてそのまま気がついたらこの道に進んでいました。絵を描くことも好きだったので、照明デザインが性に合っていたんでしょうね。元々大学の演劇部で演出と脚本をしていて、芝居づくりそのものが楽しかったというのがあります。

でも照明は、稽古が進んで通し稽古の段階になってから現場に入ることも多く、もっと早くから稽古に参加して作品のことをわかったうえでデザインをしたと思うようになりました。手弁当で稽古始めから参加するなど試行錯誤していましたが、その頃、日本のバレエ団によるNDT作品の上演を手伝い、衝撃を受けたんです。「照明が作品の一部になっている、どうやってつくってるんだろう」と。どうやらヨーロッパではデザイナーは早くから稽古に入るらしいと知り、自分の理想とする現場を経験

したくて文化庁新進芸術家海外研修制度に応募し、二人の子どもを連れてオランダに行きました。楽しくてそのまま現地に残り、今に至ります。

——照明家の仕事とは？

照明の役割はいくつかあって、まずは見せること。視覚的なわかりやすい効果だけでなく、無意識に働きかけていることが多いんです。例えば、明かりが一瞬で大きくバーンと変化するれば見ている人は興奮しますが、2分かけてゆっくり変化させる照明デザインだと、気づかないかもしれない。けれど、その変化は見ている人の無意識にアプローチします。ダンスや音楽をどう捉えるかによって、どういう照明がその場面や作品を成立させるか、ということを考えながらデザインしています。

——照明デザインにおいて大事にしていることは？

照明デザインは、その作品がもつべき一番正しい明かりのあり方を発掘していくような作業です。縁があつて自分の目の前にやってきた作品に、あるべき姿にたどり着いてほしい。そのためのベストな照明を探り当てるために頑張る。もし完成にたどり着けるなら私じゃなくてもいいんです。作品が美しいかたちになった喜びが、なにより一番ですね。

富士住建 Fuji Jukun

ちょっと、覗いてみませんか？

完全フル装備の家®



ココから覗いてね





## 神奈川芸術プレス 読者アンケート

神奈川芸術プレス(vol.168)をお読みいただき、ありがとうございます。アンケートにお答えいただいた方の中から、抽選で1組2名様を、2026年6月12日(金)上演の『Love Beyond』(KAAT 神奈川芸術劇場(大スタジオ))にご招待いたします。今後の誌面づくりに活かすため、ぜひご意見・ご感想をお寄せください。

なお、開演時間については、当選のお知らせの際にご連絡させていただきます。

### アンケート項目

1. 神奈川芸術プレスはいかがでしたか。ご意見・ご感想を教えてください。
2. 今号で印象に残った記事を教えてください。
3. 次号以降、読んでみたい特集テーマがあれば教えてください。
4. 今気になっている「ひと」や「こと」、「場所」などあれば教えてください。
5. 神奈川芸術プレスをどちらで入手に取りましたか？

応募方法：「WEBアンケートフォーム」もしくは「はがき」に、アンケートの回答とメールアドレスを明記のうえ、ご応募ください。

WEBアンケートフォーム： <https://krs.bz/kanagawaaf/m/kap168q>

はがき郵送先：〒231-0023 横浜市中区山下町32 神奈川県横浜合同庁舎3階  
公益財団法人 神奈川芸術文化財団 神奈川芸術プレス読者アンケート係

回答期限/はがき必着：2026年5月9日(土)

当選発表：厳正なる抽選のうえ、当選者の発表はメール送信をもってかえさせていただきます。

- ・当選に関するお問い合わせには回答いたしかねます。
- ・当選通知メールは、[kaf@kanagawa-af.org](mailto:kaf@kanagawa-af.org)のアドレスから送付予定です。上記ドメインからのメールを受信できるよう、設定をご確認ください。
- ・メールアドレスの間違い等でメールが送信できない場合は、当選を無効にさせていただきます。※お申し込み時にいただいた個人情報、当選通知以外の目的には使用いたしません。



WEBアンケート  
フォームはこちら

## 今号のプレゼント



写真：Tommy Ga-Ken-Wan

### 『Love Beyond』

海外で高く評価された、英語と英語手話によって描き出される、ラブストーリー。

作・出演：ラメシュ・メイヤッパン

演出：マシュー・レントン

## ご支援のお願い

神奈川芸術文化財団は、心豊かな芸術文化の創造に寄与するとともに、神奈川の地から世界に向けてその発信を回すことを使命として活動しております。活動の継続にはご支援が大きな支えになります。皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

- 賛助会員：1年を通じて事業全般にご支援をいただきます。個人賛助会員：30,000円(1口/1年) 法人賛助会員：100,000円(1口/1年)
- 個別協賛：当財団が主催する特定の公演・事業にご支援をいただきます。個人：30,000円～ 法人：100,000円～
- オンライン小口寄付：1,000円からクレジットカードで気軽に寄付いただけます。

### 賛助会員の特典

- ご芳名を掲載します。○財団主催公演のなかから選定した公演にご招待いたします。○主催公演のチケットを10%引きでご購入いただけます。○限定イベントにご招待いたします。
- 神奈川芸術プレス(年2回発行)をお送りします。○最新のチケット情報をメールでお送りします。

### お問い合わせ・お申し込み

公益財団法人 神奈川芸術文化財団 経営企画課 <https://www.kanagawa-arts.or.jp/support> 電話：045-222-0551(9:00～17:00/土日祝日・年末年始を除く)

### 公益財団法人 神奈川芸術文化財団 賛助会員・協賛・協力・寄付 ご芳名

五十音順・敬称略(2026年2月17日現在)

#### 【賛助会員】

法人賛助会員：株式会社アクトエンジニアリング / アズビル株式会社 / 学校法人岩崎学園 / 株式会社ヴォートル / 株式会社エス・シー・アライアンス / 株式会社NHKアート / 鹿島建設株式会社横浜支店 / 株式会社勝烈庵 / 一般財団法人神奈川県教育福祉振興会 / 株式会社神奈川孔文社 / 株式会社神奈川保健事業社 / カヤバCS株式会社 / 川本工業株式会社 / 株式会社共栄社 / 株式会社KSP / 株式会社合同通信 / 株式会社ジェイコム湘南・神奈川 / 株式会社清光社 / 株式会社テレビ神奈川 / 東工株式会社 / 日成工事株式会社 / 日生商工株式会社 / 日総ブレイン株式会社 / 日本発条株式会社 / パナソニックEWエンジニアリング株式会社 / Piascore株式会社 / 平安堂薬局 / 株式会社ホテル、ニューグランド / 一般社団法人本牧関連産業振興協会 / 丸茂電機株式会社 / 三沢電機株式会社 / 森平舞台機構株式会社 / ヤマハサウンドシステム株式会社 / 株式会社有隣堂 / 株式会社豊商會 / 株式会社ユニコーン / 株式会社横浜アーティスト / 横浜信用金庫 / 弁護士法人横浜パートナー法律事務所 / 横浜ビルシステム株式会社 / 株式会社ワイヤーソリューションズ / 匿名 3社

永年個人賛助会員：延命政之 / 小山明枝

個人賛助会員：味田健一 / 小川 浩 / 黒瀬博晴 / 柴田彩友美 / 鈴木真由美 / 高岡俊之 / 高野伊久男 / 田中浩司 / 戸張 実 / 中澤守正 / 橋本尚子 / 松森 繁 / 御園生和彦 / 山口健太郎 / 匿名 4名

#### 【協賛・協力・寄付】

能舞台協賛：ナイス株式会社

個別協賛：ACAO FOREST / アクセンチュア 芸術部 / Accenture Art Salon / 株式会社ルーク / 匿名 1社

協力：株式会社崎陽軒 / 株式会社富士住建

一般寄付：一柳清子 / 白土将志公認会計士事務所 / 匿名 1名

神奈川芸術プレス vol.168 発行：公益財団法人 神奈川芸術文化財団 TEL：045-222-0551

2026年(令和8年)3月11日 発行

企画・制作：公益財団法人 神奈川芸術文化財団、株式会社ボイズ

編集：安部見空・小林璃代子・及位友美(voids)

デザイン：岡部正裕(HFUdf)・三浦佑介(shubidua) イラストレーション：白尾可奈子 校正・校閲：聚珍社 印刷：深雪印刷

神奈川芸術プレス  
WEB版はこちらから



【禁無断転載・複写】無料配布

※本誌掲載情報は2026年2月17日現在のもの